

めにも一読をすすめたい稀に見る高著である。

(山崎謹哉)

中川浩一著 地下鉄の文化史：筑摩書房，1984年，A 5 判，324頁

著者は、既に、『旅の文化誌』（1979年，伝統と現代社）『鉄道記念物の旅』（1982年，クオリ社）などの著書及び『産業遺跡を歩く——北関東の産業考古学——』（1978年，産業技術センター）の編著において、アカデミーの約束ごとに囚われた記述のスタイルをとることなく、その意味では、非学術的な形をとりながら、自らの学問的発見を発表するという独自の方法を確立したが、本書もこのような著者独自のスタイルで書かれている。地理教育の歴史の研究者としてのみでなく、鉄道マニアとしても著者はよく知られているが、今回は、地下鉄に焦点を合わせ書き下ろしたものである。地下鉄の歴史そのものが120年余りしかないのであるから、歴史学的研究と言って、そんなに古い史料を使ったものではないが、本書は、歴史地理学における新しい知見を数多く含んでいる。学術書として書かれたものではなく、従って、出典や資料も記されていないから、それを学術的な成果と言うことはできないかもしれないが、過去の路線の復元のみでなく、過去の都市生活において地下鉄がもった意味、人々が地下鉄をどのようなものと考えていたかといったことが、歴史地理学のテーマと深く関わっていることは、論をまたない。その意味で本書は、歴史地理学にとっての豊富な情報源であり、幾つかの歴史地理学的研究テーマを示唆するものでもある。たとえば、過去のガイドブックや文学作品における交通体系に関する記述の中で、地下鉄がどのような位置を占めていたかということを体系的に検討することなどは重要な一つの課題となるであろう。

歴史地理学の研究とは言えないかもしれないが、本書におさめられた「漱石とロンドン地下鉄」および「漱石とメトロ」の二つの文章は、夏目漱石研究にとっては、立派な貢献をなすものであろう。おそらく、著者も意識してのことであろうが、この二つの文章は、単なる知的、エンターテインメントのための材料の提供にとどまらず、著者の推論を説得的に示そうとして、資料・出典なども本文中で詳しく示されている。この著者の漱石研究の直接的契機は、祖父が漱石の熊本時代の五高校長だったことによる

のであるが、外遊時の漱石に関する著者の研究には、地理学者としての素質も生かされていると言えよう。

本書は、歴史地理学の研究書として書かれたものではないから、それに対する言及が無いのは当然のことであるが、地下鉄と歴史地理学との関係ということになると、多くの都市において、地下鉄の建設作業によって、たくさんの遺跡や文化財が発見されたことにも言及しなければならない。どこの国でも、文化財保護に対する関心が大きくなっている現在では、遺跡にぶつかれば、地下鉄建設作業は、それだけ遅れるのであるが、初期の地下鉄建設時代には、十分に調査しないまま貴重な遺跡を、セメントで塗りつぶしてしまったこともあったろうと想像されるのである。

(竹内啓一)

室賀信夫著 古地図抄—日本の地図の歩み：東海大学出版会，1983年，A 5 判変型，230頁，3,000円

本書は、1982年2月に逝去された故室賀信夫教授の遺稿集である。著者は、生前仏教系世界図の研究によって、Imago Mundi 賞を授賞されており、地図学史研究の世界的な権威である。仏教系世界図に関する論文は、本稿には収められていないが、所収の11篇の論考いずれにも、著者の地図学史観を見出すことができる。

本書は、4部から構成されている。各部にはとくに標題はないが、第Ⅰ部では、近代以前の日本の小スケールの地図の歴史が総論的に扱われている。第Ⅱ部は、西洋や中国が、東アジアや日本に対する地理像をいかに結んでいったかを論ずる。第Ⅲ部は、地図屏部、ポルトラーノ図、大日本地震之図、東海道分間絵図、長久保赤水など、地図学史上の重要な地図や人物を扱う。第Ⅳ部では、日本のテラ・インコグニタである「北方」に対する観念や、同じく蝦夷地の地理学史的意義を論じたものである。本稿では、これらを個々に評することはせず、主に著者の地図学史観、あるいは地図観に焦点をあてることにする。

著者の地図学史観は、まず副題と同名の巻頭論文において端的に述べられる。それによれば、地図の歴史は単に地図作成技術の進歩を跡づけるものではない。それぞれの地図に表現された地理的知識や表現技術の背後にある「その図を作りその図を使った人びとの心情と生活」に着目することである。これは、著者が地図を見る時の一貫した姿勢である。こ

のことは、別の論文において、「科学的な正確さ」という要求が、地図のもつ他の要求に常に優先しているわけではないとして、「『非科学的な』地図にそれなりの意義を認め、それがどのように生まれ、どのような意味を荷ない、新しい現実のなかでどのように変貌し、消滅していったかを考え」（「日本に行なわれた仏教系世界図について」海野一隆と共著『地理学史研究』1集、1957年）、「地図の精神史」に視点をおくことを提起していることに共通する。

このような立場に立って、近代以前の日本の地図の歴史を、「薄明の時代」の古代・中世と、「開花の季節」の近世とに時代区分する。その場合のメルクマルになるものは、進化論的パラダイムに依拠して、もちろん図形の精密化など地図作成技術の質的な差もあげられている。しかし、それよりも著者が重視するのは、世界図の登場による世界観の変貌、道中国や都市図などのような地図の多様化、印刷技術の普及による量産化などである。世界図の登場については、地理的視圏の拡大や地理的情報の精密化などの新しい地理的知識の付加だけでなく、その時代の社会全体の動向との関連で世界観の変化が論じられている。ここに地図の歴史を世界観の歴史として考える著者の視野の広さを見ることができる。一方、地図の多様化と量産を時代区分のメルクマルにするのは、それらが社会の中で地図が荷なった意義に関わるからである。地図の作られることの少ない中世以前と、量産される近世以降との相異は著しい。中世以前ではその使用者が支配者層に限られる場合が多いのに対して、近世以降では民衆に広く配布する。また地図の機能の分化も、近世以降では著しくなり、様々な目的に応じた地図が作られる。ここに、それぞれの時代において地図のもつ意味合いが異なることに注目し、地図を作図者や使用者をはじめとする社会的なコンテクストまで広げて、いわば社会史的に解説すべきという著者の地図観を窺うことができる。

このように、地図はその時代によって評価することが要求され、したがって現代の地理的知識で安易に古地図を解釈してはならないとする。ほとんどの古地図には、現代から見ればきわめて「奇異な地図的造型」があることが多い。著者は、このような地図の「異形」に出会う時、それを地理的視圏の拡大にともなって消滅してゆくものとして見るのではない。むしろ「異形」が「異形」でなかった時代まで

遡ってその地図を理解し、そこから地図が作られた当時の世界像を考える。このような視点で地図を扱ったものとして、第Ⅱ部第2章「ポルトガル人の描いた初期の日本像—いわゆるオーメン型日本図について」があげられる。オーメン型の日本図の中で、日本が南北方向に大陸に接続され、半島化されているという「異形」の由来を執拗なまでに追求めている。また同第3章「魏志倭人伝に描かれた日本の地理像—地図学史的考察」では、地図ではないがその中の記述が実際よりも南に偏しすぎているという「異形」を、『魏志倭人伝』の作者、あるいはその同時代の人びとがもつテラ・インコグニタ（日本）に対するイメージであるとして、後世の地図を駆使して当時の人びとの日本像にまで到達する。

近世という地図の量産、需要の増大による地図大衆化の時代には、民間の刊行図は無視することはできない。それは、幕撰図に準拠しながらも「独自の『美しい絵画的表現』を取り入れ、また読者の便をはかるため交通関係の情報なども豊富に入れていた。このような、浮世絵師による大衆の絵図を、近世の地図史を特徴づけるものとして認める。当時においては「正確」であった幕撰図と、「図形はくずれていた」民間図とを同時に評価するところに、著者の地図観を見い出すことができよう。すなわち、地図の要件は、「科学的正確さ」だけではなく、多くの人びとに使用されることもまた一つの要件であるということである。そして、地図が大衆化すること自体も、大衆化を可能にした社会との関わりでまた重要となる。ここにおいても、地図の量産を地図史の1つのエポックメイキングとしてとりあげたことが理解できよう。

大衆の絵図は、絵画的表現が卓越する。第Ⅲ部第3章「旅の絵巻—『東海道分間絵図』の成り立ち」では、遠近道印と菱川師宣という当代一流のスタッフによる「東海道分間絵図」をとりあげる。この絵図は、精密な東海道の実測図にもとづき、縮尺は正確である。しかし著者は、この絵図をそのことのみによって評価してはいない。「実測図の科学性から訣別して、古い絵巻物の伝統的手法にかえった」という、いわば進化論的パラダイムからすれば逆行とも思えることを、むしろ「よるこびや悲しみをもって大地の上を動き歩く生きた人間の目」として積極的な意義を見い出し、「科学的正確さ」には従わない、地図における芸術性を認めている。

近年、地図学史あるいは地理学史研究について言われる、「進化論的パラダイム」に依拠している部分は、本書にも認められる。しかし、以上で見てきたように本書をそのようなパラダイムだけで括ってしまうには、あまりに重要な部分を見失ってしまうであろう。著者の「地図の精神史」、あるいは作者・使用者への視点など社会史的な視角は、進化論的な見方に必ずしもなじまないものである。

(青山宏夫)

矢守一彦著 古地図と風景：筑摩書房，1984年，A 5 判，343頁，2,400円

本書の著者は、前掲の室賀『古地図抄』の編集の労をとられている。両氏は、矢守氏自らが「山科の大人」（矢守「都市図の歴史—日本編」1974年）と仰ぐように、いわば師弟の関係にある。そこで、本書は必ずしも古地図のみを扱ったわけではないが、本稿では前掲の『古地図抄』との関連で、とくに著者の地図観に焦点をあわせることにする。

本書は、第Ⅰ部「地図と風景画の狭間」、第Ⅱ部「街道の風景」、第Ⅲ部「京・大坂の絵図」、第Ⅳ部「古地図を眺めて」の4部から構成されている。

書名の「風景」という用語は、従来の地理学ではあまり使われることがなかった。それがあえて書名に選ばれた点に、本書のライトモチーフを見い出すことはあながち無理なことでもあるまい。この点については、冒頭の第Ⅰ部第1章「風景のランゲージュ」で適確に述べられており、本書全体の格好の序章となっている。それによれば、著者は景観の一般的側面よりも、むしろ主観的側面に注目しようとする。その時、「自己のパースペクティブで捉えた空間、私が眺め、その中で生きている環境の眺めという意味合いをひびかせて使われている風景」という用語が選択されることになる。つまり、それによって主体にとって意味のある場所としての景観を再考してみようとする。これは、近年のヒューマニスティック地理学の立場と共通するものである。今あえて風景をとりあげることの意義の1つはここにあるとも言えよう。

冒頭でも述べられているように、本書で扱われる地図は、近世のものである。したがって、表現様式からすればいわゆる絵図がほとんどである。これらの絵図の分析にあたり、特定の絵図の個別的な考証ではなく、著者はこれらの絵図に広く認められる

＜ランゲージュ＞に注目し、通絵図的な検討を試みる。まず、描かれた絵図の視点の高さに注目する。本書で扱われる近世の絵図には、鳥瞰図的表現のものが多く、この鳥瞰図の源流やその意義を扱うのが第Ⅰ部第2章「鳥瞰図史考」、第3章「名所図会とその周辺」である。そこでは、鳥瞰図は日本古来の伝統的表現であるとした上で、それが必ずしも地図作成技術の未熟さを補うために採用されたものではないことを繰り返し強調する。著者は、絵図作成以前にも平面図が作成されており、平面図と絵図とは進化系列の中で必ずしも先後関係になるとは限らないとする。そして、鳥瞰図的表現は「わかりやすさ、親しみやすさをはかる」ために採用されたとする。「地図は正確ばかりが能ではない」「地図の風景画化」によって、空間的配置を示すに適した地図（平面図）と、美しく楽しい絵画との間をゆれ動く絵図は、大衆性や芸術性の観点からも検討される必要がある。従来の地図史研究に卓越していた「進化論的パラダイム」ではすくい上げるのでできない、このような視点からの地図史研究は、著者の「地図の社会史」との関連で、今後の1つの課題となるであろう。

その他、絵図の分析視点については、第Ⅲ部第1章「京都図の流れ」、第2章「京の一覧図について」、第3章「『増修改正摂州大坂地図』に関する覚書」などにみられるように、表現範囲の広狭、地誌的記載事項の多寡、諸地物の空間的配列の精度などを手がかりとして、地図相互の系譜的關係や地図史の時期区分などを行なっている。しかし、第Ⅲ部第3章の「地図の社会史」にもみられるように、絵図をそのようなタテ系の中に位置づけるだけでなく、それぞれの絵図がそれぞれの時代にもちえた意義や、それぞれの絵図が機能した時代の「社会集団のマンタリテ」との関連にも注目している。地図へのこのような「まなざし」は、室賀の「地図の精神史」にも通ずる所がある。

「私の眺め」である風景が最もよく描かれるのは、表現する範囲の比較的狭い＜大縮尺図＞である。したがって、本書で扱われる古地図は、都市図、町絵図程度の表現範囲のものが中心である。この点で、世界図や日本図などの＜小縮尺図＞を対象とする前掲の室賀『古地図抄』とはたしかに異なると言える。しかし、これは風景というキーワードを表面的にしかとらえない場合である。それをスケー